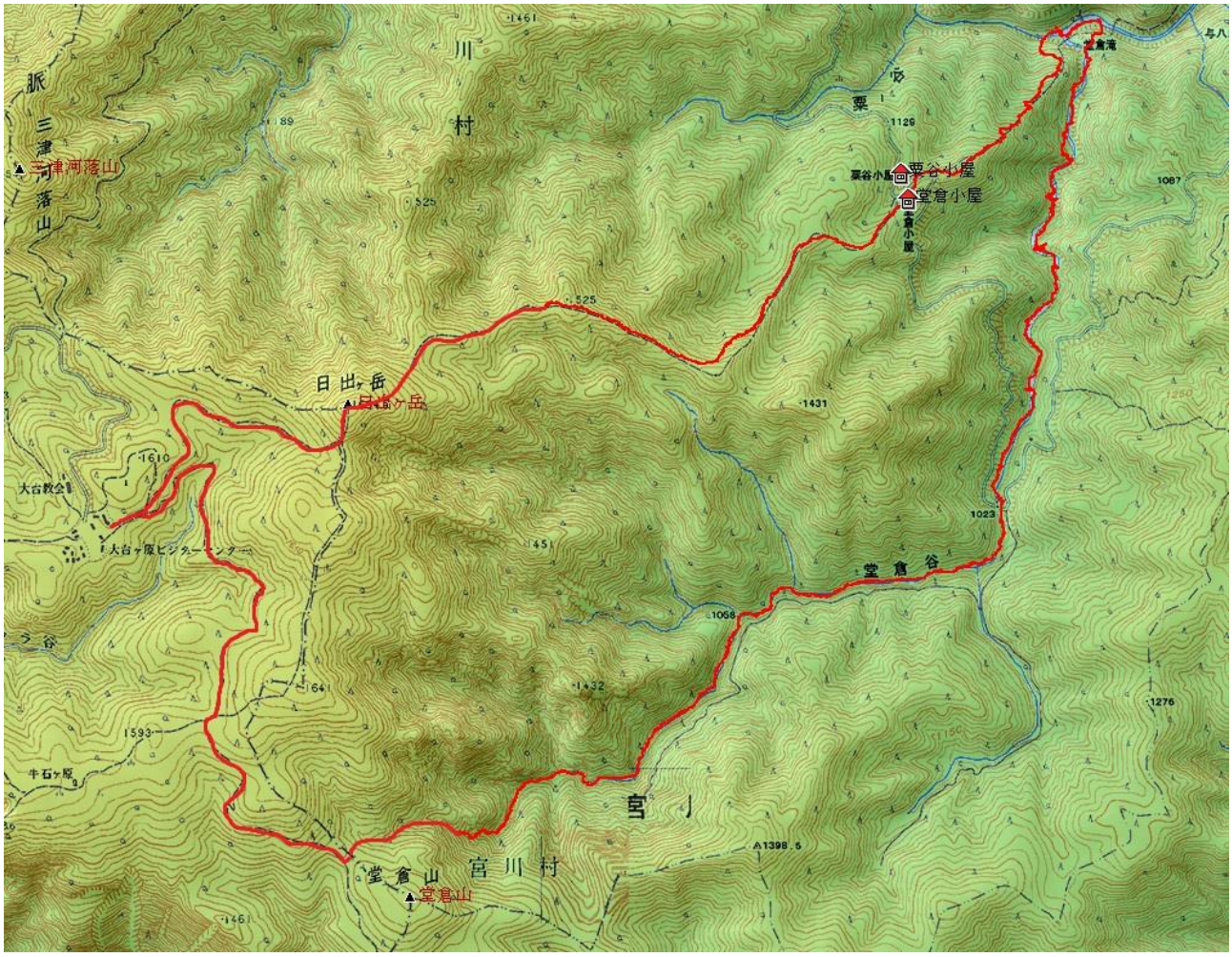
堂倉谷遡行（台高）

【日程】2013 年 8 月 15 日～2013 年 8 月 16 日
【エリア】台高
【形態】沢遡行
【メンバー】Ｙ、Ｏ
【報告】Ｙ.Ｙ



≪ルート／タイム≫

８月１５日　大台ヶ原Ｐ（14:30）～堂倉谷吊り橋（17:20）（ツェルト幕営）

８月１６日　幕営地出（5:30）～中七ツ釜、奥七ツ釜遡行～池池谷出合（11:15）
～二股・Ｐ1058（12:30）～13:45 石楠花谷出合～堂倉山と正木ヶ原鞍部（17:00）
～大台ヶ原Ｐ（18:00）

≪報告≫

８月１５日

日出ヶ岳から堂倉谷吊り橋までは尾根くだりが続く。昨年、再開された粟谷小屋（分岐点で通過せず）や堂倉谷避難小屋が途中に存在し、場合によっては宿泊も可能だ。道標がマメに表示されており、あと何キロで堂倉滝という親切さ。ただ、堂倉滝吊り橋から奥は大杉谷は平成１６年に当地を襲った台風被害により登山道は完全に復活していない。

（詳細は大杉谷登山センターのサイトを参考にされたい。http://oosugidani.jp/index.html）
到着後、ツェルト幕営を行う。いまにも雨が降るかと思われるくらいに湿気が高かった。

（上）豪快な堂倉滝が吊り橋から望むことができる。

８月１６日

・入渓

堂倉滝前の流れを横断し、大杉谷登山道を次の吊り橋まで辿る。吊り橋の支柱横から小径を上がり、尾根上の架線場跡に出る。我々はここから下降したが、一部で懸垂をした。しかし、後で分かったことだが尾根を少し辿ると小さなルンゼがあり、フィックスロープが張られていた。我々は途中からこれに合流した。しかし、一部ロープが落脱しており、どちらにしても懸垂が必要かと思われた。落石には要注意である。

・最初の滝

最初に５m斜滝と、それに続いてこの谷最大の３０m斜滝が続く。最初の５mは釜を泳げば右から登れそうだが、次の斜滝は左岸巻きなので２つとも巻いた。

・中七つ釜

滝自体は大きくはないが、釜が非常に大きいため容易に越えられない。しかし、へつりや水に入ることにより、だいたいは突破できる。最後、両岸が立った淵の右岸岩上を進むと詰まったが、ここから淵中に５ｍほど懸垂し対岸に渡ると容易に抜けることができた。

終わり近くの１０ｍ斜滝は、左岸をロープ確保で登った。上部で傾斜が急になるが、ハーケンが連打されておりクラックもあるので支点が取れる。ハーケンはどれも古いので注意が必要。フィックスロープも２本垂れ下がっているが、劣化が進んでおり信用できない。フィックスに頼らずとも登れる。

・奥七つ釜

水量が少ないせいか、楽に登れた。奥七つ釜の出口に１０ｍ斜滝があり、右側が登れそうである。しかし、例のごとく釜が大きいため近づきにくい。左岸を泳いで行くか、右岸から左岸に釜を泳ぐかだが、距離の短い後者を選択し、１５ｍほど泳いで右岸から左岸に渡った。滝自体は、右側を容易に登れた。

（左）左の窪みは奥七ツ釜の底深きプール　　（右）１０Ｍ斜滝。ザックを浮き輪に泳いで突破

・林道前後

谷はひらけ、伏流部分もある。変化に乏しい。たまに小滝が出てくるが、釜が不釣り合いにばかでかく、容易に通過できない。

（上）池池谷出合。巨大なプール、次第に伏流へ。

・上部連瀑帯

だいたいの滝は登れる。釜もほとんど気にならない大きさである。よく紹介されている２段２５ｍは、３０ｍはある。１段目は右側を登る。ホールドはあるが支点は取り難い。１段目と２段目との間に大岩があり、大岩の間を乗り移るのだが少し離れているので注意が必要。２段目は左のルンゼを少し登り、壁によりかかった流木を使いながら草付き壁を登り、落ち口にトラバースした。小灌木で支点がとれる。２段目は滝の直登も報告されているが、傾斜が強く、支点は取れないようなので危険と判断した。

続くトユ状１８ｍ斜滝は抜け口がやらしいとの報告が多いが、抜け口が流木と土砂で埋まっており容易に登れた。以後、１０ｍ前後の滝が数本出てくるがすべて直登できた。ロープは何回か使用した。

・源流に入り谷が右に曲がる付近は、左の稜線が近い。水流はわずかとなり、変化は期待できないので左に上がり、堂倉山と正木が原との鞍部に１５分ほどで登り着いた。後は、登山道をひたすら辿り駐車場へ。